

## 遠くて近い存在

### 中 路 喜 之

永井先生が亡くなったとの知らせを耳にしたのは、慶應義塾大学での手続法研究所の理事会の終わりがけだった。体調を崩されていたのは伺っていたのだけれど、余りにも唐突な報告に一瞬言葉を失った。永井先生は、慶應義塾大学の石川明研究会の先輩である。そしてそれだけではなく、現在私が勤めている大月短期大学にいらしたことがあって、そこでも私の先輩にあたる。研究会の「先輩」であり、教員としての「先輩」でもあった。研究会のOB会などでも、はじめの頃、先生の方から気さくに声をかけてくださり、持ち前の人なつこさとたくさんの引き出しで、私にたくさん話をして下さった。当時はよく分かっていなかったのだが、物事を的確に「切る」、その分析力と展開力に魅せられていたのだと今にして思う。私が大月短大で先生と同じ科目を担当するようになったのは、先生が移られて随分経ってからのことである。私が、勤めはじめた頃には永井先生と一緒に働いていた先生もいらっしゃり、先生の熱い授業の評判を聞いた。実際に、先生の授業を目にすることはなかったのだが、その評判が私の勝手な先生のイメージ通りのものだったことを今でも覚えている。そして、もっと鮮明に思い出されるのは、永井先生の「二重の後輩」になって暫く経ってからのことである。私は、大阪で学会発表をしたときのことである。自分では、それなりに無難にこなしたつもりでいたのだが、永井先生から質問をいただいた。自分の中で、まだ詰め切れていない部分についての個所に関する質問で、こちらのモヤモヤを見透かされているような感じがした

のを覚えている。問題点を指摘され、そして的確にアドバイスをし、はなむけをして下さった。そして休憩に入ったあとも、先生はいろいろな方向性を示しつつ教えて下さった。先生には直接言えなかったのだが、親しみの持てる、本当に頼れる「先輩」だった。意見の中に自分のスタンスがはっきりと見え、優しい中にも厳しさをもち、私のような不出来な後輩までもちゃんと見て下さった。教員として、研究者として、追いつきたい憧れの先輩の1人だった。残念ながら、関西と関東とでなかなかお目にかかるチャンスはなかったのだが、それでも「つながっていた」と信じたい。もっともっと話をして、お酒も御一緒したかった……。私にとって、永井先生は「遠くて近い存在」なのである。心より、お悔やみ申しあげる。